

浮世絵「七福神けいこまち」を読み解く

岡 泰 正

本稿は、関西大学博物館所蔵になる大判3枚続きの浮世絵（錦絵）をめぐる謎解き、いわば博物館内でのギャラリートークのような内容である。

まずは、キャプション（題箋）的説明から。むかって右と中央の図にまたがって「七福神（しちふくじん）けいこまち」と読める内題が見える。各図には作者の署名、応需房種画（もとめによりて ふさたねえがく）、好二付（このみにつき）房種画、とあり歌川房種の作品である。続いて、画中に年月印が摺り込まれ、文久2年（1862）と読み取れる。版元は木屋宗次郎。

歌川房種は、江戸末期の安政ごろから明治30年（1897）ごろまで江戸・東京で活動した浮世絵師で、歌川国貞の門人・歌川貞房の弟子である。姓は村井、名は静馬、画姓は歌川である。

この3枚続きの浮世絵は一見、七福神がくつろいでいる図なのだが、おのおののしぐさは、なにか意味ありげに見える。いったい「けいこまち」とは何なのか。実はこの浮世絵は、役者の一種のコスプレ、当時の人気役者たちを勢揃いさせたブロマイドなのである。



木札

木札、右から「弁天たの」とあり、たのすけ。続いて「大こくしかん」で、しかん。「恵び寿訥」で、とっしょう。「びしゃ門ごん」で、ごんじゅうろう。「福ろくうざ」で、うざえもん。「寿老つる」で、つるぞう。最後に「ほていむら」で、むらえもん、というわけである。師匠が、道場や手習いの門弟たちの名を木札で掲げる習慣があったことを踏まえていると考えられる。札では、師匠の弁天が一番上座（むかって右）に掲げられているわけである。

これを整理してみよう。

右から 恵比寿／2代 澤村訥升、布袋／初代 坂東村右衛門、福祿寿／13代 市村羽左衛門（5代 尾上菊五郎）、寿老人／初代 中村鶴藏、毘沙門／初代 河原崎権十郎（9代 市川團十郎）、大黒／4代 中村芝翫

左端の三味線を持った弁天（弁財天）は、美貌をうたわれた3代澤村田之助である。もとより琵琶を三味線に持ち替えた技芸をつかさどる女神。福神のなかの紅一点、琵琶を奏する弁天を邦楽の美人師匠に見立て、邦楽の稽古。お師匠さ



弁天

んの弁天に稽古をつけてもらうまで、気ままに遊んで待っている、鼻の下をのぼした当時の市井の旦那衆を風刺しているものと思われる。役者個々の性格からして、さもありませんという見立ての妙が、描写に利かされているものと推定される。成駒屋、大黒の4代中村芝翫は、打ち出の小槌を脇に置いて稽古中、いたって神妙である。大坂道頓堀に生まれ、江戸で活動し、「大芝翫」と呼ばれた名優だが、持ち前の目の鋭さは抑え気味にして声をしぼっている。毘沙門の権十郎が、中央でひとときわ豪華に、どっしりと貫禄豊かに描かれているところなど役者の格を意識している。

そして、インドの毘沙門と、中国の寿老人は、中国渡来の拳遊びをしているという趣向。拳遊びにつきものの脚付き杯を間に据え、いっそう異国情緒を漂わせる。拳の勝負に負ければ罰酒（罰杯）を飲むという遊びである。絵の中で、寿老人の左かたわらに置かれた酒次（さけつぎ）のジャグもヨーロッパ舶載のガラス器、あるいは中国製の金属器を意識しているのかも知れない。拳遊びは、朱盃などを両者の間に置いて、勝ち負けを競って飲みあうわけだが、この絵のように西洋風のガラス・ゴブレット・ギヤマンの杯も好んで用いられた。馬上盃という趣向か

も知れない。この杯が輸入品か、和製の鉛ガラスによる模製品かは、絵ではわからない。ともかくも異国趣味からワイングラスの器形が、宴席の座興に好まれたのは事実である。

では、弁天に何を習っているのか。稽古をつけてもらっている内容は、歌舞伎役者の話であるから、やはり歌舞伎伴奏の長唄、あるいは、可能性が高いのは長唄の対極となる端唄を習っていると、見たほうが自然である。市井の三味線教授は、天保の改革で禁止され、裏を返せばそれほど盛んだったわけだが、解禁となったそれ以降は、いっそう三味線の習いごとが流行した。

一見すると、小唄の習いごと、とも考えられるが、小唄の三味線は、撥を使わずにつまびくだけなので、撥を持っている弁天の姿から察して、やはり役者たちが端唄を習っている、というふうに考えたほうが自然だし、面白くもある。逆に当の役者が、伴奏の長唄を習う図とは、あまりにそのものすぎて、設定として芸がないだろう。

いずれにせよ、当代の人気役者たちが「神様」であるのに行儀の悪い無作法な稽古の待ち方で、退屈しのぎに思い思いのことをしていると、この絵の利かせどころである。右端のえべっさんは、まかないの板前という役割。

弁天に扮しているのは、屋号は紀伊国屋、3代澤村田之助である。この弁天らしく宝尽くしの帯をしめ、宝珠の冠をつけた美貌のお師匠さんが、本図の見せ場である。スターの登場。美しさと芸の上質さをたたえられた澤村田之助(弘化2年(1845)～明治11年(1878))は、宙乗りの演技中に落下、このときの負傷から脱疽

をわずらい、その後、悪化して、慶応3年(1867)へボン博士(J.C.Hepburn アメリカ長老派教会の医療伝道宣教師。へボン式ローマ字の創案者で、彼が編纂した和英語林集成の表記法がもと。明治学院の創始者)の執刀によって左足をひざ上で切断し、アメリカ製の義足をつけて舞台をつとめた。しかし、病の進行はとまらず、最終的には右足も切断、右の手首から先、左手の小指以外のすべての指を失い、それでもなお女形の名優として舞台をつとめ続けた。驚嘆すべき気力と技能の持ち主だったのである。明治5年(1872)正月興行を途中降板し、その後は舞台に復帰することなく、芝居茶屋、芝居小屋の経営を試みたがふるわず、病は悪化の一途をたどり、最後は精神に変調をきたして明治11年(1878)33歳の若さで亡くなった。悲劇の名優であった。

そしてまさに、この「七福神けいこまち」が描かれた文久2年(1862)の「紅皿欠皿」の宙乗りで、その運命の落下事故がおこるのである。この「稽古待ち」で描き出された田之助は、舞台の姿ではなく、「役者似顔」であるから、事故のあとか先かは、問題にできない。七福神の図は吉祥性から正月の版行かも知れない。いずれにしても、この浮世絵が運命を分ける年に描かれていることが、後世の私たちの気持ちを肅然としたものにさせるのである。ちなみに、蔓つき三つ巴(ともえ)の柏紋(恵比寿の紋)をつけた恵比寿が鯛をさばく「まかない」に徹しているのは、2代訥升が、田之助の七つ違いの実兄だからで、稽古をつけてもらうには、身内であるため、接待係にまわっていることが読み取れる。

この恵比寿は、習い事の客ではないのである。

浮世絵はその時代を写し取っている。美術を専科とする私は、西洋風の器形を持つガラス器の使われ方に確かに興味を持つが、学術を越えて、名優・澤村田之助のその後の哀切な運命に寄せる思いの方が、この浮世絵を見る時、いっそう強いのである。



《七福神けいこまち》歌川房種画 文久2年(1862)
木版色摺 版元・木屋宗次郎(関西大学博物館蔵)